

東京女子高等師範學校
日本幼稚園協會

幼 兒 の 教 育

主 幹
倉 橋 惣 三

六 月 號

萬國幼稚園協會案
倉橋惣三先生序

日本幼稚園協會譯

最近刊

幼稚園保育要目

菊判洋裝美本・正價金壹圓・送料八錢

此の幼稚園保育要目は四歳より六歳までの幼児の必要に應じて選擇し、その内容は兒童の共通經驗を代表した保育教科書であります。一、自然物及自然現象から説き起し、家庭、社會生活より製作、言語、文學、遊戯、音樂に至るまで保育上必要な條件は悉く網羅せる良書。

發行所

東京上野公園
寛永寺坂下園

教文書院

電話下谷 三〇四七番
振替東京四六一二一番



日本幼稚園協會編輯幼兒教育

會長 東京女子高等師範學校校長 茨木清次郎
 主幹 東京女子高等師範學校教授 倉橋惣三

贊助員 (五十音順)

| | | | |
|--------------|-----------|--------------|----------|
| 東京女子高師教授 | 巖谷季雄 | 帝國教育博物館長 | 棚橋源太郎 |
| 東京帝大醫科講師 | 乙竹岩雄 | 東洋大學教授 | 田子一氏 |
| 東京高師教授 | 太田孝之 | 東京女子師範學校校長 | 高島平三郎 |
| 慶應大學教授 | 文博 大瀬甚太郎 | 東京女子高師囑托 | 龍山義亮 |
| 東洋幼稚園長 | 醫博 唐澤光德 | 帝國教育會理事 | 土川五郎 |
| 早蕨幼稚園長 | 岸邊福雄 | 文部省社會教育課長 | 野口授太郎 |
| 帝國教育會會長 | 久留島武彦 | 京都帝大教授 | 乘杉嘉壽 |
| 東京市學務課長兼視學長 | 澤柳政太郎 | | 野上俊夫 |
| 東京高師附屬小學校主事 | 佐々木吉三郎 | | 坂内みつ |
| 東京女子高師教授 | 文博 下田次郎 | 東京女子高師教授 | 堀七藏 |
| 東京女子高師教授 | 文藝士 菅原教造 | 東京帝大教授 | 文博 松村武雄 |
| 東京女子高師附屬高女主事 | 醫、文博 富士川游 | 奈良女子高師校長 | 文博 松本亦太郎 |
| 東京女子高師講師 | 藤井利譽 | 奈良女高師附屬幼稚園主事 | 醫博 三田谷啓 |
| 大阪市教部育長 | 福士末之助 | 東京高等學校長 | 湯原元一 |
| | 文博 谷本富 | 東京帝大教授 | 文博 吉田熊次 |





次 目

| | |
|--------------------------|--------------------------|
| 長編 小説お | 春……東京女子高等師範學校教授 岡田美津……九三 |
| 風 | (遊戯)……………土川五郎……九一 |
| 風 | (樂譜)……………萩原英一……九〇 |
| た | こ(童謡)……………茂木由子……九〇 |
| メンタルテストに就て……東京女子高等師範學校教授 | 古川竹二……八〇 |
| 自發活動と目的活動……東京女子高等師範學校教授 | 倉橋惣三……六八 |



東京音樂學校教授

茂木由一先生作
萩原英子先生作
原由一先生作曲

第一輯



菊倍判製本・裝幀頗る美本・正價

・送料

近刊 七月上旬發賣

無邪氣な 無邪氣な
可愛い、可愛い、
歌へる 弾ける

眞に子供の氣分になつた
天國に遊ぶ様な氣分になつて
教へられる新曲です

- 第一、カケククラ
- 第二、大きなお日様
- 第三、ピ ア ノ
- 第四、タ コ
- 第五、コケツコ

ピアノ
伴奏付

發行所

東京東野公園永寧寺坂下

敎文書院

電話 三〇九
番 七五九
振替 東京一六一番

東京女子高等師範學校內

日本幼稚園協會

幼 兒 の 教 育

主 幹

倉 橋 惣 三



第 三 號

1942

第 二 十 四 卷

自發活動と目的活動(二)

——保育原理の問題——

倉 橋 惣 三

然らば其自然がとれる發達原理と云ふのは何であるか。是は進化論の法則、或は發生心理學の法則としては色々の言葉を使ふやうであります。要するに試行錯誤の法則に歸着せしめて仕舞ふことが出来る。少くも自然の發達を受身の意味に於て解決するのではなくて、自然の活動の意味に於て解釋しますならば、環境の影響と云ふやうなことは別として、矢張試行錯誤と云ふ事實の中に這入つて來た時のみ意味があると云ふことになるのであります。自然には我々の子供が持つて居るやうな親切な先生と云ふものはありませぬ、只自然の道を辿つて來た其中に失敗をし又試み、又失敗をして又試みる、其大きな試行と錯誤との中に發育して來た、斯う云ふ風に見るのであります。此試行錯誤の法則は赤ん坊が成長して參ります事實の中にも幾らも見られることであり、又老人方がよくいふ、世の中のことは經驗して失敗して見なくちや分らぬ、苦勞して見なければ碌な者にはならぬと云ふのも矢張此意味と見られます。親切に親切にしようとして居る教育者でも、我が親切の施し方の足りないことばかり心配して居る教師でさへも、子供に試行錯誤を強ひるのであります。其自然の取れる發達原理そのものに任せやうと云ふ時に於ては試行錯誤に全部依頼して居るものと云はなくちやならぬ、其試行錯誤と云ふものは確かに自然の執つて來た大きな發達原理でありますけれども、是は其特色として所謂偶然であります。自然の方から申しますならば、それだけしかなかつたと云ふ意味に於て必然であるかも知れない。或は論理上の言葉

でいへば實然なものである。斯う云ふやうな關係に於ては決して偶然と云ふべきものでないかも知れませぬ。偶然に春時いたものが秋實つた。偶然に秋時いたものが、春花が咲いたと云ふやうなことは、是は自然の方から云つたならば愚かな云ひ方かも知れないのでありますけれども、人間の立場から云へば、計畫と云ふことをすると云ふ立場から云へば、是は矢張偶然と云はなくちやならぬ、其偶然にだも信賴して居ると云ふことが、此自動主義の根柢であります。

自動主義の考と云ふものを裸にして、眞裸にしてさうしてぎゅーく云はせて見れば、今申したやうな所に落着くと思ひます。自動主義と云ふものがありながら、自分の主義に便り此方の先生に便り、此方の方法に便る。要するに實際は普通の教育法と違はないと云ふやうな意味の自動主義者ならば、それは自動主義ぢやない。自動主義と云ふことを裸にして突詰めて見ると斯う考へざるを得ない。即ち何故出發點其ものだけの所に價値を置くか其自然の出發點を捉へることに依つて、自然の發達過程を取る。其自然の發達過程は人間から考へれば可なり危険が多いやうな偶然的なものであるけれども、それをだも信ずる、さうしてさへも安心を持たれる程の自發的發達能力が子供にあると思ふ。斯う思つて居るのであります、私自身の考を申上げると云ふことは、此講義では出来るだけ慎みたいと思つて居るのであります、論理の自然の歸着を辿つて行くだけの餘裕がありませんから、私は其結論へ行くと云ふことを申上げなくちやならぬ、其意味に於ては自發活動と云ふやうなことは小さな兒童の持つて居る自然ではありまして、其自然と云ふものは反動的な意味を除いては當然尊重せらるゝだけの尊重價値を持つて居るが、そんなに大騒ぎしなくて宜いものに過ぎない、斯う云ふことを云ひたいのであります。

齒切れの悪い云ひ方ではありますが、自然なれば自然であると云ふことに於て當然それだけの値打があることである、多く買被ぶる必要もなし。低く見下げる必要もない、それだけのものである、若し其反對の事實が之までに經驗されて居りましたならば反動的に買被ぶると云ふことになるのは、是は人間の通常でありますけれども、併し反動要素と云ふものを

除いて考へるとして、正當にデビエトすると云ふ上に上にも出ないし、下にも下らないだけの話であります、我々此空氣の中に生活して居る爲に何もそんなに飛立つ程嬉れしいと思ひませぬ、併しどうかして甚だ空氣の稀薄な所に追ひやられたとしたならば、それから出て來て空氣の所に行けば此自然狀態を非常に有難く思ふでせう、我々教育と云ふ學說から出發して子供を教育した場合には前の教育學說から反動的に色々の教育學說へ移つて行きますが、教育と云ふものを離れて子供それ自身の自然性へ自分で打突つて行く、其經驗を反動的に云ふものだからと云へば、兒童は自發性のものである。だから自發性のある教育過程の中に意義を持つものであると云ふことは、何にも特殊な問題でないと言ふやうになる、所謂教育論者のトリックでありまして、心理的に子供の實際生活を有りの儘に只眺めて來たものに取つては此子供が自發生活を持つて居ると云ふことは別に問題ぢやないと云ふのは、我々が實際的に子供を取扱ふ時に其問題を輕んじて居ると云ふことでないことは申すまでもありませぬ。

茲に於て私はフレイベルがどう云つたとか、昔の人がどうしたとか、誰が言葉を強めて自動主義を説いたとかと云ふやうな教育史上の事實を離れて只子供と二人相對して考へます時には、自發性と云ふものは、或は自發活動と云ふものは、我々が當然其兒童に於て認めて行くだけのことでであると云ふことになるのであります、之を言換れば之を以て特に新教育原理とすると云ふことは、そんなに新しいことでも何でもないと云ふことに見たいと思ふ、誤がない爲にもう一度申上げて置きますが、斯う云ふ風な考察の結果、我々は斯う云ふ所に來て居る、詰り兒童の自發活動と云ふことは是は兒童の持つて居る我々が良いと云ふから良いのぢやなくて、詰らぬと云つた所で仕方がないのであるし、我々が拵へたものぢやないから我々の手柄にもならないし、無理にとめると云ふことも到底出來ないことではあるし、詰り相當の自然に對する尊敬を拂つて相當に之を取扱つて行くと云ふだけのことだと云ふことになるのであります。

さう考へました自發活動と云ふものは自然の大きな發達の原理に従ふと云ふ其自然的樂天的な立場から云ひますなら

ば、其偶然であると云ふ所に實に大きな千萬無量の意味がある、小さな人間が小さい工夫をして小さな小細工をしてやうと云ふ教育に對してネーチユアの法則に従つて、其ネーチユアの發達に於て育てると云ふやうな言葉を使つて見ると、もう只そんなことを云ふだけで何だか心持が良くなるやうな所があります、大層自分が自然其ものに合體したやうな氣がある、殊に人のして居る小細工を見て、批評的にリターン、ネーチユア、と叫べば大層一種の精神の興奮したやうな感を持つものである、それ程是は本當に自然的で、或る意味に於て理想的な言葉であります、本當にナチュラルで、リアリテイツタのことであるだけ、それだけリアリテイの響を持つて居る言葉であります、ルツソーの教育論と云ふものは徹頭徹尾リアリテイズム、ナチュラリズムであつて、實際青年教育者がエミールを讀んで、ずつとあの名文に依つて與へられる心持と云ふものは極度の理想主義教育論に入る、それ程此自然の法則に信賴せしめ、總ての詰らぬものでも信仰する、それが自分をエレベートして呉れるものになりますやうな其一般法則に基いて、それは非常に偉い事實に人間としては感じて來る。

けれどもさう云ふ精神的興奮を離れて此偶然性と云ふものを見ますと、自動主義其もの、教育論としての批評を離れて、之だけ見ますならば、是は要するに氣紛れの要素が這入つて居ると云ふことが云へると思ふ、氣紛れが宜いと云ふのならば偉大なる理想主義である、そこまで行くなら面白いことであり、そこまで行ける人は又尊敬すべき人である、皮肉に云ふのでなく、實際さう思ふのです、けれども氣紛れそのものは矢張氣紛れを持つて居る、氣紛れと云ふことを心理的に置換へて見れば、此氣紛れなることを我々が信賴し得る其信賴の心的要素は可なり感情的なものであります、私の與へられた理性に依つて、斯うだから斯うだと云ふ理詰めの所に私が信賴するならば理性的の信賴であります、あの大きなネーチユアの氣紛れよと云つて、おーと云つて信賴するならば可なり是は感情的の要素を持つて居ります、同時に其氣紛れの生活に依つて生活して居る所の子供、言換へれば、氣紛れそのものを私は此處で良い悪いと云はずとも、精神活動の

出發點と云ふ所だけで生活して居る子供、精神活動の出發點と云ふ所だけで生活させられて居る子供と云ふものは子供自身氣紛になり、感情的になると云ふことは免れない。

渾いやうであります、もう一度縮めて申しますならば其出發點だけに於て意義のある自發と云ふことも、其自然的出發をさせれば、自然的大きな法則に依つて發達するものと信ずれば、翻つて其出發點と云ふことに意義ある、併し出發點それ自身だけを見て行きますならば、此出發點で自發的にそれは過程も結果もない生活であつて、此方の出發點で生活する、又此方の出發點で生活すると云ふやうに、あの道を迷つてぐる／＼して居る人と同じで無限の出發點を持つて居るとも云へる。理を追つて考へて行く人と云ふものは一時間考へても、寝ずに考へても一つの考を、一つの生活をして居る、只眠られなくて、色々のことを色々考へて居る神經衰弱性な考へ方と云ふものは時間に於ては長く續くのでありますけれども、始終新しい出發點から此方を考へ、此方を考へ、此方を考へ、詰り出發點だけの生活を續けて居ると云ふことは、は、それが或る大きな教育的事實としての自然過程に導くと云ふ點にはどんな或は價値があるか知れませぬが、出發點それ自身だけで、子供が始終生活して居ると云ふことは子供をして氣紛れの感情本位のものにする自動主義教育論は自發興味と云ふものを非常に重きを置く、インテレストと云ふ問題は教育學上實に幾度も／＼着物を脱換へた言葉でありましてうっかりどの意味と云ふことを判然云はないと飛んでもないことに我々が間違を起す、併し自動主義教育論者が云ふ自發興味と云ふものは其自發的と云ふ所に重きを置いて居るインテレストである、其自發興味は前に申上げた所に依つて見れば本當の純粹のさう云ふ内在的の活動々力から出た興味であるのだから、或は自分も知らぬ人も知らぬけれども、外の何物かに刺戟され誘引されて居るのか、そこは判然しないにしましても、何方にしましても、結果と過程に興味はない、只出發點に於て興味を感じて居る。

斯う云ふ生活は若し我々がそれに依つて吾人の人生を辿るとすれば驚くべき偉大なる信念であるか或は無責任な出鱈目

であるか、何方かに歸着する、我々が子供をしてさう云ふ自發興味だけを持つて居る子供に育てると云ふことはリクイン、ツィ、ネーチュア、そこに何だか總てを解決したやうな安心があるやうであります、我々の如き人間として、ネーチュアに解脱することの足りないものに付ては大いなる信頼が又そこに残つて来る、屹度良くなると云ふ信頼……屹度悪くなると云ふことならば心配ぢやない、是は悪いに定つて居る、併し自發興味に依る偶然生活と云ふ偶然的生活の習慣と云ふものが悪くなるか知らぬ、良くなると人は云ふが悪くなるかも知らぬと云ふ所に人間の不安と云ふものはある、其人間の不安と云ふものに對して、自發活動に埋合はす所の、或は自發活動に相對立する所の其概念として持ち出したものが目的活動であります。

目的活動と云ふことは、教育學の中で申しますならば、まあ新しく起つて來た概念であると云つて宜いかも知れませぬが、併し世の中に新しきことあるなしと云ふやうな立場から云へば、どつかで誰か一度考へたことでありませうが、併しそれを所謂問題に取出して來たのは比較的新しいことであるかも知れませぬ、自發活動と云ふことは古くからあります考であるけれども、特にフレーベルを聯想する如く、目的活動と云ふことに於て我々が第一に聯想するものはデウエーであります、デウエーの心理説、或はデウエーの主意的哲學、それらのものが生れて來た元とを捜せば、それは色々のものがありませうけれども、それが或る一人の人の良い頭腦を通して我々に提供されました其問題としてはデウエーと云ふ所まで遡るだけで先づ宜からうと思ひます、意思の心理と云ふ純粹心理學者の研究の中に於ては目的活動と云ふものは古い問題であります、意思論即ち目的生活論でありまして、是は別に新しいことでも何でもない、けれども之をあの大いに主意的活動であるとされて居りました色々の生活の中にまでそれを持つて來て、さうして主意的だと考へられて居る自己の生活まで要するにそれは目的活動である、意思的のものである、斯う云ふやうな働を與へたのはデウエーであると云つて宜からうと思ひます、其デウエーの考が直接でないとしても、特に基礎になつて居るプロジェクトメソッドは詰り此目

的觀念を元にした教育の一種の代表的な、近頃の代表的なものと云ふことが出来ませう。

勿論一つの教育説と云ふものは極めて複雑なものでありまして、教育それ自身が複雑なるが如く、それを纏める綜合學説が矢張複雑であることは云ふまでもないことであつて、一つの教育學説を一つの基本概念で何でも説明して仕舞ふと云ふことは是は無理な又無用な努力であるのであります、プロジェクトメソッドは實に色々のことがそこに這入つて居りませうが、其色々の所を色々の所で見ると従つて、プロジェクトメソッドの値打にしまして、近頃外國に其言葉を譯したりする時に又違つた譯し方もしませう、併しながらプロジェクトメソッドが其精神活動の形式に關係して居る範圍に於ては目的活動であります、プロジェクトメソッドが我々に教へます所のある目的を子供に與へて或は目的と云はなければ問題を與へて、其問題を子供をして解をしめる、其解くには抽象思考の法則に依つて解くこともありませう、之を具體考に依つて解くこともありませう、兎に角問題解釋、プログラムのソーピングの其働としてプロジェクトメソッドと云ふことは考へられなければならぬ、私は此處で前にも御断りしました如く、新しい名に依つて行はれる新教育學說其ものをアズトータルとして取扱ふと云ふことは思はないのでありますからして、プロジェクトメソッドの論は此處にしないのであります、併しそれに依つて代表して居る或は大きな一部と少くともなつて居る目的活動と云ふものは、是は大いに考へなくちやならぬと思ふのであります。

目的活動と云ふものは何であるか、是は自發活動の如く説明の難かしいものでありませぬ、自發活動は餘りに當然のこととでありますからして、何とか定義しなければ分らない、目的活動は自然生活じやなく、目的を持つてそれに向つて生活して行く、大人の我々の生活に極めて良く似て居るものでありますからして是は定義の形にしないでもしない方が、却つて良く分るものであるかも知れませぬ、兎に角子供の子供を自發活動の如其く出發點に於て尊重しないで、其生活活動の結果と云ふ所に於て見て行かうとする、只所謂内在的潜在的な自發活動に依つて、氣紛れな感情的な生活でなく、行手は

分らないと云ふ生活ぢやなく、小さい生活でも下らない生活でも、子供が其行手を見詰めて、結果を見詰めて目的を見詰めて、それを目當てとして出發して居ると云ふ生活、是が目的活動でありませう。

此點に於て、他の點では又問題が變つて参りますが、此點に於て自發活動と目的活動は取敢へず區別がせられる、自發活動の場合を自由遊戯に於て大いに實現するとしますならば、目的活動の場合に於ては一々目的問題を子供に與へる、所謂プロジェクトを與へると云ふことが大きな仕事になつて來る、楽しく遊べよ、自發を恣にせしめよ、自發的であれよ、後は自然が良く育て、呉れると云ふ考へ方ぢやなく、御前の生活と云ふものは斯う云ふ風な目的に向つて進め、此問題を解く爲に進め、其目的其問題を子供の活動の出發點とさせる、併しながら其目的と云ふものが、若しも子供の自發的興味と逆らふものであり、又さう云ふ與へ方をされたとしましたならば、是は我々が通り過ぎて居る、そんなに尊重もしないが、併し當然にそれに便らないなれば、兒童の自發性と云ふものに對して矛盾を生じて來ませう、若し目的を與へて問題を與へて、それに到達する、其活動を尊重すると云ふだけに我々の考が止つて、其目的の與へ方が、其目的の性質が子供の自然性である自發興味と云ふやうなものと、何らの關係のないものであつたならば、我々は折角自發興味の問題を通り越して來た今日として逆戻りをして仕舞つて居るのであります、そこで目的と云ふものと問題と云ふものを目當てにして活動させますけれども、併し此目的問題と云ふものは兒童の自發興味に關係のある、少くともそれに逆らはない所のものたらしめなければいけない、若し目的と云ふものを此處に與へて、さうして之に對して子供が生活することが子供に取つて全然自發に反するものでありましたならば、是は自發活動論者が大いに忌み嫌ひました所の、明かに云へばさう云ふ自發性を認めない教育と云ふものに後戻りしたものと云はなければならぬ。

そこで活動それ自身から云ひますならば、其子供のやつて居る活動それ自身から云ひますならば、出發點を主にするか、到達點を主にするかと云ふことに於て二つの違つたやうなことでありますけれども、併しながら、其目的と云ふもの

が矢張其出發點を自發的ならしむるやうな目的でなければならぬと云ふ意味に於ては引括めて、是が自發性のものでなければならぬと云ふことになつて來るのであります。出發點だけを見て考へる自發性ぢやない、目的までの活動を入れた其自發生活と云ふものになつて來るのであります。同じ結果を豫期し居る活動に似て非なるもの二つあります。

私が此箱を作る、一生懸命に箱を作つて居ると外では見える、私の心では此箱そのものに付ては何らの自發興味がないのである、早く作り上げて之を市場に出した時に之から得られる所の何圓かの利益、それだけが私の狙つて居る所である、若しも其何圓かの利益と云ふものがないならば、私は決して此箱を作ることには一生懸命にならない、一生懸命に此箱を作つて居るやうに外からは見えますが、箱そのものが私の今の活動に何らの重要な位置を時つて居るものぢやなく、若し何圓かの利益が作らない爲に得られるならば止めて仕舞ふ、お前が箱を作ることとを止めれば幾らくやると云ふ人が誰かあつたならば止めて仕舞ふ、此場合に於て矢張何圓か所謂結果として、私は一生懸命らしく努力して居る、恐らくは一生懸命にやるのでありませう、或る種の一生懸命にやるのでありませう。

もう一つは、或る何かの理由に依るでありませうが、箱そのものゝ必要を私が大いに感ずる、是が生んで來る第二の結果ぢやなく、箱そのものゝ持つて居る第一結果それが私の狙ひ所である、それで一生懸命それを作つたとすれば、何の爲に木を削つて居るか、何の爲にそんなに寸法を見るのか、何の爲にそんなに釘を打つて居るのか、釘の爲に釘を打つて居るのぢやない、削る爲に削つて居るのぢやない、箱を作る爲に、言換れば結果ある活動をして居るのでありますけれども、併し其場合に於ては箱そのものを作ると云ふことが、私の自發性の中に入つて仕舞ふ、金が欲しいと云ふことの爲に箱を作つて居るならば、金を得ると云ふことゝ、箱を作ると云ふことは判然目的と手段とが、結果と手段とが別のものに分れて仕舞ふのであります、其場合に於ては金の得たい方は目的であるかも知れない、自發的なものであるかも知れないが、箱を作ると云ふことは頼まれ、ばすることである、厭でもすることである、まあ間に合はせて置けば宜いと云ふの

で甚だ不眞剣な心でもするものであります。若しも子供をして結果意識のある生活をさせやうとする時に今申しました前條の如き結果の持たせ方をするならば、折角是は我々が當然ではあるけれども、良うこそ氣が付いて居ります児童の自發性を尊重したいと云ふ心持に對して丸で無駄な結果になる、目的は與へたい、結果は與へたい、結果的の生活はさせたいけれども併しそれは決して、児童の其活動をして無意味なる手段活動ならしめるものでない、其目的と手段とが必然に附着して居るものならしめなければいけない、斯う云ふ風に自然になつて來るでありませう。

若し斯う考へて來ますならば目的活動と云ふものは矢張大きな一つの自發活動の中に這入つた時だけ教育上の意義が出て來る、所謂自發的目的活動と云ふものになるのでありませう、私は所謂亞米利加流のプロジェクトメソッドの話が出ませぬ前から、當然子供の生活から何も發見でも何でもないのでありますが、當然見出されて居ります自然の歸着として、有目的の教育と云ふことを考へたり、人に語つたりして居りました、又或る實行もして居た、其有目的の教育と云ふものは、今日亞米利加の色々の説に依つて見ますれば、詰りプロジェクトメソッドの一部要素をなして居るものであるらしい、其プロジェクトメソッドと云ふ言葉に依つて聞きますと云ふと、大層是は特殊なことのやうに思ふのでありますが、其有目的の生活と云ふものを児童の中から私共が見出して來ますと、自發生活も亦児童の中から見出したのでありますから、是は或る一つのものになる、教育學上の學説として自發活動を主にする所の自動主義と、目的生活を主にする所のプロジェクトメソッドとを相對しますと云ふと、是は何だか違つたもの、やうに感ぜられる、勿論委しく研究する人は決してさうではないが、ちよつと違つたもの、やうに考へられる、けれども児童の生活の中から、其自然の有様が自發的であり、児童として矢張目的に向つて生活をしようとして居る、せしめる能力がある、我々の仕向け方が悪い爲に児童をスポイルし、第二結果を要求する所の手段生活だけを以てすることもないぢやない、繪が面白くも何ともないが、二重丸が欲しい爲に學校へ行くこと自身が面白くも何ともないが賞められる爲に、さう云ふ風な第二次的目的だけで總ての生活を樂々手段化

して、所謂スポイルして居ることも澤山あります。

我々の甚だ責任を感じる所でありませんが、併しさう云ふスポイルされて居ない子供、スポイルされて居る子供であつても、純正目的活動、即ち自發的な遊びのやうな簡単な精神活動形式を持つて居ると云ふことは兒童觀察に於て認める、若しさう云ふ風な見方から行きますならば、此活動と云ふものが、出發點を主にした自發活動と活動の到達點を主にして考へた目的活動論と云ふものは要するに活動それ自身が自發である、其生活單位が自發であると云ふことの意味に於ては決して二つのことぢやない、見方が此方を見たか此方を見たか、我々の見方の偏りだけであつて、兒童は兩方の其活動單位の中に於て區別出来ないものになつて來るのでありませう、そこで言葉を假に附けますならば、出發點の方を主にして考へた時に、其自發性はスポインタナイズされて自動性と云ふものになつて來る、何だか音だけでもサイダーの口がボンと飛んで行くやうに聞えますが、出發點に於てスポインタナイズして行く、それに對して結果と云ふものを入れた自發生活はモチベーション、所謂動機性、モチベーションと云ふことが、目的活動の概念を主とします所のもので、其總ての教育論或は教育方法の中に重要視されて居るものであります、是は何か外からの力に依つて動かされたものでないと云ふことに於ては之も之も同じことであります、其意味に於ては兩方共自發的なものであります、只此方は出發點だけを主にして見た時の名付け方である、是は到達を主にして見た時の名付け方である。

若し極端な自發活動論者が云ふ如く、子供の活動は皆出發點だけで、後は子供に何らの活動抱擁性がないものである、出發點の所だけは子供が自分で皆するが、後は我々が皆してやらなければならぬと云ふ極端な自發性の論をしますならば、其時に於ては恐らく此結果も從つて兒童に當然出來ること、は云へなくなるかも知れない、併し我々が兒童の生活を見まして、成る程兒童は氣まぐれに出發點の自發性はあります爲に遊戯をして居ります、さうして我々がひよつと小細工を混じないでどうかしようかと思ふ時に、我々も亦自然に對してハンブルな感じが起るとしますならば、是は手を着けな

い方が宜い、その儘で置いて見よう、それはなまじ手を着けちや悪いと云ふやうな我々に心持が起る。けれども同時に我々子供を見て居りますと云ふと、可なり所謂自由遊戯と云ふものも只純衝動的の自發性ではなく、或る結果、或る結果に向つて活動する。隠れん坊と云ふことは、大抵其意味に歸着するのでありませう。まあ斯う云ふ風な考察をいたしました、其目的活動を主にする教育法と云ふものが兒童の上にどんな影響を及ぼして來るかと云ふやうな問題は次の問題になるのです。

客「幼児教育者として、私に何が一番缺けて居ませうか」

主「さよう、失禮ですが、ほんとうの藝術がお分かりにならないことでせうかな」

客「では、どういたしたらいいのでせう」

主「いゝ繪を御覧なさい。いゝ音楽をお聴きなさい」

メンタルテストに就て (承前)

東京女子高等師範學校教授 古川竹二

三、メンタルテストの性質

然らばメンタルテストは元來如何なる性質を有するものであるか、讀者も知らるゝ如くにメンタルテストとは智能の試験と云ふことを意味して居る。換言すれば、人間の智能の性質を試験するものである。然らば智能とは如何なるものであるか、之は多くの學者に依つて定義を異にして居るが私は、今日實驗教育學者として時めいて居るドイツのシュテルン氏の定義を取つて之に答へる。

智能とは個人が意識的に己れの思考を新たななる要求に適合せしめる一般能力即ち人生の新たななる問題及條件に對する一般精神的順應性である。

斯かる智能を如何にして試験するかと云ふに、この智能の働らきを幾つかの要素に分けるのである。即ち注意とか

記憶、推理など云ふ様に分けて之等が働らいて人の智能を作るものであるが故に之等を試験する問題を選んで之をなす時には、人の智能が試験せらるゝこととなる。メンタルテストは斯かる原理に依つて出來たものである。

然し乍ら我々の智能の働らきは複雑にして注意の試験と云ふも、純粹に注意力のみを働らかして之に答へるか。推理の試験と云ふも、只推理力のみを依つて之を解くか、と云ふに左様ではない。之等の心的要素は互に錯綜して問題を解く場合が多い。それ故に大體に於て何れの心的要素を用ゐるかを云ふにすぎないことは、讀者が知つて居なければならぬことである。

四、メンタルテストの問題

私は次に如何なる問題が今日用ゐられて居るかを大體述べ

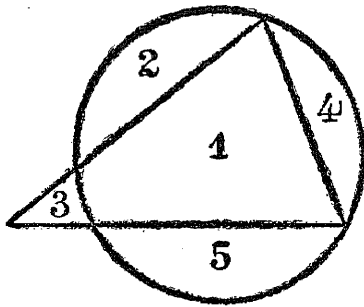
て見る。

注意の試験。

(一) 次にある数字の中から358を消さしむ。

2 5 3 4 7 0 9 5 8 1 6 3 4 8 5 2 7
 1 4 8 6 0 9 3 2 6 8 0 3 9 6 4 3 5
 0 5 4 3 9 2 7 8 5 1 6 8 3 2 0 9 7
 3 8 1 4 2 5 8 9 3 1 2 6 4 5 6 3 7

即ち之等の数字を印刷して二分か三分の時間を與へて、之を行はしめるのである。之は又片假名に仕へることも出来る。注意力の秀れたる者は、劣れる者よりは誤りなく又より多くを消す事が出来るものである。之はもし幼稚園で行ふには文字に代はるに○や△を以つてしたらば應用する事が出来ると思ふ。



(二) 例へば次の如き形を與へて、之に就きこの問題を提出して之に答へしむ。

一、三角形の中にある数字

は何か ()

二、三角形の中にあつて圓の中にない数字は何か ()

三、圓の中にある数字は何か ()

四、圓の中にあるが三角形の中にない数字は何か ()

(三) 次の左右を比較して若し同じであれば○をつけ異つて居れば×をつけよ、

| | | | |
|-------------------|-----------|-------------------|-----------|
| | 5 2 | ○ ○ × | 5 2 |
| | 2 7 3 | | 2 7 3 |
| | 0 5 2 | | 0 5 3 |
| | 3 1 7 2 | | 3 1 7 2 |
| | 4 9 6 3 | | 4 9 6 2 |
| | 1 7 3 6 0 | | 1 7 3 7 0 |
| 南 東 西 北 | | 南 東 北 西 | |
| タ サ ミ ヤ シ コ | | タ サ ミ ヤ コ シ | |
| △ □ ▽ □ | | △ □ ▽ ○ | |
| 6 5 5 8 3 4 8 2 9 | | 6 5 5 3 8 4 8 2 9 | |
| 4 9 8 3 2 2 9 1 4 | | 4 6 8 3 2 2 9 1 4 | |
| 9 5 6 7 3 4 5 2 9 | | 9 5 6 7 4 3 5 2 9 | |

今日行はれて居る注意力の試験は前述の様なもの为主と

して用ゐられて居る、このまゝのものでなくとも大抵この
應用であると見れば差支はない。

記憶の試験。

(一) イコシ。ヤミラ。タキノ。ホチア。クイサ。と云ふ
風に意味をなさざる假名の組合せを十個計りつくり之を十
分乃至十五分被験者に記憶せしめ後之を書かしむるもの。

(二) 種々の事物を描ける畫を數分間見せて後之を取り。
その繪中にありし事物の名を書かしむるもの。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| シ | イ | コ | ミ | ヤ | ム | キ | ラ |
| 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| イ | ミ | シ | ヤ | ラ | コ | ム | キ |
| | | | | | | | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| コ | キ | ラ | シ | ヤ | ミ | イ | ム |
| | | | | | | | |

(三) 上圖の如く

上に模範を與へて之
に従ひ同じ假名の下
には同じ數字を書き
て進む、數分にして
その結果を見るもの
であり。記憶力秀れ
たる者は直ちに模範
を記憶して一々之を

見ずして答ふことが出来る爲めに記憶力の劣れる者より

も早く進むことが出来るのである。之は必らずしも數字と
假名にてせよ形と數字とにてなせるものや、漢字と假名に
てなせるものも見るので何れにてもよいのである。

記憶の試験は大抵以上の如き形式で行はれて居る。

推理の試験。

之は最も多くの形式を有して居る次にその幾つかを擧げ
て見る。

(一) 數參列の完成。即ち次の數參列の中に空いて居る
處に適當なる數字を入れよと云ふもの。此の問題は私が數
校に於て試みたるものであり、又讀者に於ても試みに之を
解かるゝことは興味あることと思ふ故に次に多くの問題を
擧げて見る。

時 間 十 分

次ノ各列ノ空^クイ^テ居ル處ニアル線ノ上ニ、適當ナ數字ヲオ
入レテサシ。

- 例一. 2 4 6 8 10 12 14 16 18 20
- 11. 1 1 2 2 3 3 4 4 5 5

| 問題 | (一) | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
|------|-----|----|----|----|----|----|-----|-----|---|---|----|
| (一) | 10 | 12 | 16 | 18 | 22 | 24 | 26 | 28 | | | |
| (二) | 12 | 11 | 10 | 8 | 7 | | 4 | 3 | | | |
| (三) | 1 | 3 | 7 | 9 | 11 | 13 | 15 | 17 | | | |
| (四) | 39 | 37 | 35 | 33 | 31 | 29 | 25 | 23 | | | |
| (五) | 4 | 5 | 7 | 14 | 19 | 25 | 32 | 40 | | | |
| (六) | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 8 | | | | |
| (七) | 64 | 32 | 16 | 4 | 2 | | | | | | |
| (八) | 8 | 15 | 29 | 36 | 43 | 57 | 64 | 71 | | | |
| (九) | 10 | 15 | 16 | 20 | 21 | 26 | 30 | 31 | | | |
| (十) | 2 | 8 | 10 | 10 | 20 | 10 | 26 | | | | |
| (十一) | 7 | 10 | 11 | 13 | 14 | | 20 | | | | |
| (十二) | 4 | 9 | 16 | 25 | | 64 | 81 | 100 | | | |
| (十三) | 4 | 7 | 14 | 17 | | 77 | 154 | | | | |
| (十四) | 32 | | 28 | 29 | 23 | 27 | 25 | | | | |
| (十五) | 6 | 10 | 13 | | 15 | 13 | 10 | | | | |
| (十六) | 60 | 55 | 46 | 45 | 46 | 48 | | | | | |

若し右の十六問題を十分間に於て十四題以上解くことを得る人あらば此の種類の智能の優秀なることを證するものである。私の經驗に依るに十四題以上を解く人は百名中一名に足りないと思つて居る。又十六題全部を十分間に解いた人があるならば天才者と言ふことが出来ると思ふ。

(二) 論理的推理。之は次の如き形式にて正しき答へを求むるものである。

○次ニアル問題ノ四ツ宛ノ答ノ中カラ、正シイノチ一ツ宛選ンデ、之レニ○ヲオツケナサイ。

一、若シばらガすみれヨリモ高價デアルトスレバすみれ

ハ

ばらヨリモ高イ

ばらノ價ト同ジ

ばらノ様ニ高クナイ

ばらヨリモ安クナイ

二、正雄ガ義雄ヨリ年上デアアルナラバ、正雄ハ

義雄ヨリ若イ

義雄ヨリ年ヲトツテ居ル

義雄ノ様ニ年ヲトツテ居ナイ

義雄ヨリモ年上デナイ

三、君子ハ竹子ヨリ脊ガ高イ、左様スレバ竹子ハ

君子ト同ジ位高イ

君子ヨリモ低イ

君子ヨリモ低クナイ

君子ヨリモ高イ

(三) 短かき文章の言葉を不秩序に並べて之を正しく並べるもの、例へば

一、咲く。春は。花が。

二、日が。なると。沈む。夕方に。

三、人は 勉強。偉い。皆な。小さい。から。時。した。

1. is white snow

2. Water in fish swim

3. the in sets west sun the

4. Neveran ocean the takes days cross to it

5. Few making a impossible avoid it to is mistakes

(四) 二三行の文を與へてそれが合理的が不合理かを答へさせるもの。次に大正十二年度に女高師附屬高女の入學試験に課したるものを二三舉げて見ると。

命令。次の問題をよく讀んでその意味が正しければ「誤」をお消しなさい。若し誤りならば「正」を消して()の中に其のわけを簡單にお書きなさい。

一、或人が自分の居る隣りの室で音がしたので「誰かそこに居るのかい」と尋ねた。「いゝえ」と云ふ返事が其の室から聞えた。

正、誤 ()

二、或る人から私に手紙が來ました。其の中には次の様に書いてありました。「若し此の手紙が着かなかつたら直ぐに知らせて下さい。私は又直ぐに同じ事を書いて差しあげますから」と。

正、誤 ()

三、或る人が私の家に父を尋ねて來たが、父は留守であつたので私がおの人に名前を尋ねたら「あなたのお父さんは私の名前をよく御存じですから、私が來たと申

上げて下さい」と云つて歸つた。

正、誤（ ）

四、誰にも二人の親があり、四人の祖父母がある筈です。

それで今日居る人には誰にも四人づゝの祖父母があるわけだから私共の祖父母の時代には今日よりも四倍の人が居たわけです。

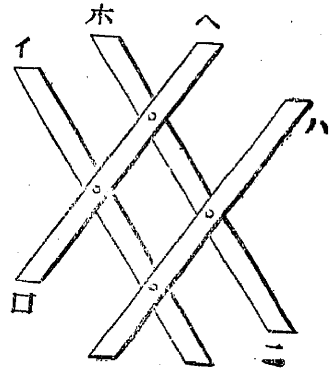
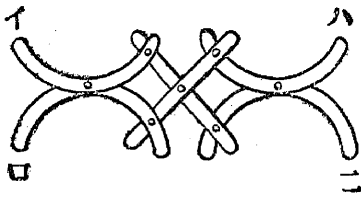
正、誤（ ）

以上の如き問題に就いて試験をして見ると秀れた児童は正しく之を理解し而して簡単に之を説明して居る。此の種類の問題を二〇も作つて試験したならば、之だけでも推理力の優劣は明らかにすることが出来る。

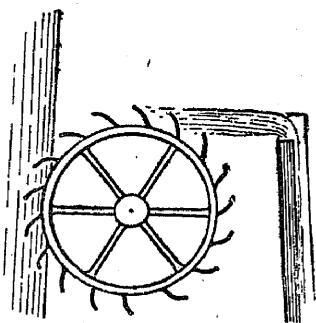
(五) 圖形に依つてする推理。之は推理すべき材料を畫きて之によつて推理をなさしむるものである。例へば

一、左の圖に於てハニを閉ぢればイロは如何なるか。又ホへは如何なるか。

二、左の圖に於てハニを閉ぢればイロは如何なるか。



三、左の圖中の車は何方にまはるか。



右の如き物理的の問題もドイツなどに於ては行はれて居る。

聯想の試験。

(一) 次の問題の左右を比較して反對であれば×をつける。

- | | | |
|---|---|---|
| 寒 | イ | 賛 |
| 悪 | イ | 成 |
| 走 | ル | 笑 |
| 來 | ル | 笑 |
- ×
- | | | |
|---|---|---|
| 暖 | イ | 善 |
| 同 | 意 | 急 |
| 嬉 | シ | ガ |
| 行 | ク | ル |

(二) 線の上にある言葉と似て居るものを下の三つの中から選びその右に線を引く。

- | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 沈 | ム | 下 | ル | 退 | ク | 進 | ム |
| 語 | ル | 歌 | フ | 叫 | ブ | 話 | ス |
| 悲 | シ | ム | 嘆 | ク | 笑 | フ | 怒 |
| 大 | 將 | 公 | 爵 | 將 | 軍 | 大 | 臣 |
| 東 | 京 | 名 | 古 | 屋 | 仙 | 臺 | 大 |
| | | 阪 | | | | | |

(三) 線の上にあるものが常に有つて居るものを二つだけ、下にある五つの中から選んでその右に線を引く。

- | | | | | | |
|-----|----|----|----|---|-----|
| 人 | 頭 | 杖 | 靴 | 口 | 帽子 |
| リンゴ | 籠 | 種子 | 皮 | 柄 | 赤色 |
| 自轉車 | リン | 人 | 荷物 | 車 | ランプ |

(四) 次の文の空いて居る處に下にある四つの語の中から一つを選んで線を引く。

- 一、夜は 澤山輝く。 月が。 星が。 日が。 夕日が。
- 二、正成は 戦死した。 大阪。 一ノ谷。 四條畷。 湊川。
- 三、學者は をなす。 遊戯。 食事。 研究。 議論。

分類の試験。

(一) 五つの言葉の中で一番関係の少ないものゝ右に線
を引く。

例ニアル様ニ縦ニ書イテアル五ツノ言葉ノ中デ、一番
關係ノ少イモノチ一ツダケ選ンデ、其ノ右ニ線ヲオ引
キナサイ。

(例一) 歩兵、新兵、工兵、騎兵、砲兵、

(例二) 櫻、バラ、ウメ、梨、桃、

問題

(一) 袴、羽織、時計、帽子、手袋、

(二) 獅子、牛、犬、猫、虎、

(三) 箆筒カシス、鏡臺キヤウダイ、座蒲團ザブツ、針箱、椅子、

(二) 次の意味を表にして書く。

一、正雄の父を良太と呼び、兄を吾一と云ふ。花子の弟
は良雄であるが、花子は正雄の妹で、良雄はミヨ子の直ぐ
の兄である。之等の兄弟姉妹は大學、高等學校、高等女學
校、小學校及び幼稚園にそれぞれ通つて居る。

二、ヨシ子の此の前の日曜日の買物は次の様でした。お
母さんの石鹼(二十錢)とハミガキ(十錢)自分のハンカチ(二

錢)と書用紙(二錢)、弟の色鉛筆(十錢)、お祖母様へのバ
ラの花(三十錢)。之だけで七十四錢だけの買物になりまし
た。始めに一圓いただいて行つたので二十六錢残りまし
た。

美的判断の試験。(特に文章や詩に就いて)

一、十行ばかりの文章を與へてその最もよく書いてある
と思ふ處に線を引け。と云ふ仕方でははしばらく入學試験
に用ゐらるゝ故に例は不要であらう。

二、次の詩を讀んで上中下の點をつけよ。之は我國に於
ては未だ行はれて居ないがストツクブリツチが著書中にあ
けて居るものをこゝに引用すると次のやうである。

1. A. Once there was a violet,

Growing near a stone;

Is reminded me of a star,

All alone in the sky.

B. A violet grew by a mossy stone,

Wher' it was hard to see;

It looked like a star, for it shone

As pretty as could be.

O. A violet by a mossy stone,

Half bidden from the eye !

Fair as a star, when only one,

Is shining in the sky,

2. A. Music, when faint voices cease,

Continues in the memory ——

O dows, when the violets fade,

Linger where their smell was made.

B. Music lives in the memory,

Though the songster's voice is done.

Sweet odours haunt the nose,

Though the violets that waked them

are gone.

C. Music, when soft voices die,

Vibrates in the memory ——

O dows, when sweet violets sicken,

Live within the sense they quicken.

之等の外に尙ほ多くの種類があるけれども之を一々擧ぐ

る時間を有しない故に尙ほ深く研究せんとする人は次の書を讀みねんことを希望する。

Terman : — Measurement of Intelligence

Ballard : — Mental Test

Stockbridge : — Measure your mind

Sterw. Wiegmann : — Methodensammlung zur

Intelligenzprüfung.

五、メンタルテストを行ふ場合の注意

(一) 問題の解き方をよく理解せしめねばならぬこと
元來メンタルテストは短時間に行ふ様に出来て居るものである故に、その解き方をよく理解せしめて置かなければ、受験者は如何にすべきかに迷へる間に時間をすたしてしまつものである。それ故に少し説明の困難なる種類の問題においては、例を以つて之を説明する様にしなければならぬ。

(二) 受験者を幾組にも分けて之れをなす場合には、各試験官は其の施行法を統一して、置かなければならない。

(三) 時間は嚴格に一定して、出来るならばストップ打

を用意して置くこと。

(四) 点数は、問題の種類により其の價値を異にし、即ち出来た問題の數と時間とを参考して、点数を定めること。

(五) 少なくとも四五種類の試問を行ふこと。之れは、一二種のみを行ふ時には、偶然と云ふことがあるか知れないことを豫想する爲でなる。四五種類を行ふ時には、偶然といふことがあるとしても大いに緩和されるからである。

(六) 試験官は受験生の側に至り之れをのぞき見してはならない。

以上は、主として中等學校に於ける入學試験の場合を述べたのであるが、それは今日メンタルテストは主として中等學校に於て最も問題となつてゐる爲である。幼稚園及び小學校に於てメンタルテストを以て、入學試験を行ふところもないではないが、前者に比すれば遙かに少ない。それ故に中等學校に於ける場合を述べたのである。

最後に私が、衷心より云つて置きたい事は、メンタルテストを、亂用しない事である。メンタルテストは、入學試験の如く止むを得ざる場合か若くは、教育學や、心理學の

徒が、科學的研究の必要の爲になすべきものであつて、妄りに之れを行つて、兒童に差異をつくる事は、避けなければならぬ。吾々は、教育者と云ふ立場に於ては、凡ての兒童を平等に取扱ふべきものである。優秀者のみを愛顧すべきではない。ヘスタロッツがスタンツの孤兒院に集つた子供達に就て、「This complete ignorance was what troubled me least, for I trusted in the natural powers that God bestows on even the poorest and the most neglected children.

」此の全く無智なる事は、私を少しも惱ましはしなかつた。何故なれば、私は最も哀れなる又最も恵まざれる子供達にさへも、神が與へた自然の力と云ふものを信じたからである」と云つた言葉は味ふべきものであると思ふ。

又孔子は、吾れ生ながらにして之れを知るものにあらず。古へを好むに敏にして、之れを求むるなり。と云つて居る。優秀なる者も、平凡なる者も、古へを好むに敏なるか否かに依つて其の價値が定まる。教育者たる者の考ふべきは茲に存する。(丁)

遊戯動
風

作歌
曲茂
萩木
原由
英子

□歌 詞

たごくあがれ あがれくあがれ

うへあがれ たかくあがれ

あがれくあがれ

あれくとんだ とんだくとんだ

あつちへとんだ こつちへとんだ

とんだくとんだ

あれくまつた まつたくとまつた

くるくまつた くるまつた

まつたまつたまつた

くるくくるくくるくる

風

歌子由木茂
一曲英萩

調
2/4

| | | | |
|----------------------------|----------------|--------------------------------|--------------------------------|
| <u>1 5 1 5</u> | <u>2 3 2 0</u> | <u>5 5 5 3 1 1</u> | <u>2 3 2 0</u> |
| タ コ タ コ | アガレ | アガレ アガレ | アガレ |
| <u>3 · 2 1</u> | <u>5 6 5 0</u> | <u>5 · 1 3</u> | <u>2 2 1 0</u> |
| ウ エヘ | アガレ | タ カク | アガレ |
| <u>3 3 5 2 2 3</u> | <u>1 1 1 0</u> | <u>4 3 2 5</u> | <u>3 2 1 0</u> |
| アガレ アガレ | アガレ | アレアレ あれあれ | ト ン ダ ま っ た |
| <u>5 6 5 1</u> | <u>2 2 2 0</u> | <u>5 5 5 3 1</u> | <u>6 6 6 5 3</u> |
| ト ン ダ ト ン ダ ま っ た ま っ た | ト ン ダ ま っ た | ア ッ チ ヘ ト ン ダ く る く る ま っ た | コ ッ チ ヘ ト ン ダ く る く る ま っ た |
| <u>1 2 3 2 4</u> | <u>3 2 1 0</u> | <u>5 6 5 4 3 2 1</u> | <u>3 2 · 5</u> <u>1 0</u> |
| ト ン ダ ト ン ダ ま っ た ま っ た | ト ン ダ ま っ た | ク ル ク ル ク ル ク ル | ク ル ツ ク ル |

□律動
遊戲 凧

振付 土川五郎振

たこくく……：臍を屈して兩手を胸前に出し糸を持てる如く

し右上方に掲げる凧を見つゝ左下方にこづくこと二回。

あがれ……：前の如くすること三回。

あがれくあがれ……：右手を左側下方に左手を右上に、次

に左手を左側下方に右手を右上方に糸をくだること四

回。

う……：右足一步右へ兩手を右上方にあけ。

へへ……：右足を左足の後方より左方にはねる時兩手を左側

下方に上體を右方に傾く。

あがれ……：右手を右上方に左手を左下方に開き右上方を見

つゝ右足にて跳躍三回。

た……：「う」と合じしことを左方に行ふ。

かく……：「へへ」と合じしことを左方に行ふ。

あがれ……：「あがれ」と同じことを左方に行ふ。

あがれあがれく……：内方を向き兩足を揃へ、兩手を兩側

方に掌を向き合せてあけ次第に頭上にあぐ「あがれ」

にて二回次のあがれにて二回又二回と次第に上方にあ

ぐ。

あれ……：右足一步後方へ兩手を下にして拍手一回す。

あれ……：兩手を左右に開き掌を下し指先を下方に左上を眺

む。

とん……：拍手一回左足を後方に引く。

だ……：兩手を左右に開くこと「あれ」と同じくして右上方

を眺。

とんだくとんだ……：兩手を左右に開き掌を下に左足より

跳躍四回。

あつちへとんだ……：左足より左方へ三步し「とんだ」にて左

食指にて左上方を指す。

こちらへとんだ……右方へ同じくす。

とんだくくとんだ……上體を少しく屈し軽く手を振りつゝ、

右方より駢足(四歩)にて廻はる。

あれく……前のあれくと同じ。

まつた……とんだと同じ。

まつたくまつた……兩手を高くあげて手先きを左右に交

互に運かしそれを見つゝ足踏八回。

くるくるまつた……前の「あちちへとんだ」と同じことを行

ふ。

くるくまつた……前の「こつちへとんだ」と同じことを行

ふ。

まつたくまつた……左方より駢足にて廻り内方を向く。

くるくるく……左足を右足の右へ右足を軸にして右方へ

まはり内面す。

くる……兩手を高く頭上に掌を向き合す。

くる……左足を後方に引き左膝を床に蹲踞し上體を前に屈

して下方を向く、あげたる兩手を前方より下ろし更に
左右後方に八の字形に張る。

○幼稚園保育要目

永く本誌に連載して居た、萬國幼稚園協會案の保育要目を、更に校訂して出版することとし、既に印刷を了し、近刊の運びになつて居ります。現代の新らしい保育原理の思潮に基いて編纂せられた要目として、實際家にも、幼稚園の研究者にも、最も有益なるものとしておすゝめします。今日の幼稚園教育を論ずるものは、何人も此の要目を一讀して置かなければならないともいへます。稚幼園がどういふ性質のものであるかといふことを知るためにも、最も適切な参考書です。本誌發行所敎文書院の發行です。

お春

東京女子高等師範學校教授 岡田美津

一〇 アラデン君

商賣には、とかく有り勝ちの景氣不景氣といふものを、たつた一時間經驗して見て、お春とおしまの晴れやかだつた氣持もすこしは曇らされてしまつた。二人は、賣らうと思ふ家の入口へは、連れ立つて行かぬ事に定めてゐた……一所だとしても、眞面目に口上を述べられまいと思つて。それで、門のところまで一人が馬の手綱をもつてゐると、も一人が石鹼の見本をもつて、その家の、買ひさうな人に面會するのだつた。おしまは、三個を賣り、お春は小函を三つ賣つた。人を説きつけるのは、どつちが上手でどつちが下手かは、始からよく定まつてゐたのが、二人は、賣れるのも賣れないのも、時の運だとはかり考へてゐた。御客の方は、おしまを見ると、石鹼はいらないといふし、効能をきかされても、やつぱりいらなうといつた。お春には、幸運の星が附添つて居ると見えて、この子の面會した人は、石鹼が丁度無くなつてゐたのを思ひ出したり、さもなくても、將來に入用だからといつたりした。こんな譯で、おしまが一生懸命になつてしても甘くゆかぬ事を、お春は殆ど何の骨折もしないで仕逢けるのであつた。

「お春さん。こんど、あなたの番よ。ほんとに有りがたい」とおしまは、一軒の家の門の前に馬を停めて、奥まつた住宅を指しながら、「私、まだ先刻の慄えが止まらないの。實は、ある所で、婦人が二階の窓から首を出して『お歸りく。函の中に何を持つて居たつて不要だから』と怒鳴つたのだつた。こゝの家にはどんな人が居るか知らないけれど、窓の戸が

残らず閉まつてゐるわ。もし留守だつたら、ここの家は勘定にいれないで、この次の家も、あなたがするのよ。」

お春は、門からの細道を傳はつて、横手の入口のそこへ行つた。その縁の搖り椅子に、一人の男が座つて、玉黍蜀の皮を剥いてゐた。風采のよい男だつたが、若いといつて可いのか、それとも中年といふのだから、お春には分らなかつた。とにかく、その男は、都會のものらしく、顔をきれいに剃つた手入の屈いた口髭のある、そして身にしつくり合ふ服を着けた人だつた。お春は思ひがけぬ人物に出遇つて、すこし面喰つたが、自分の用向を述べるより他に、どうしやうもなかつたので、

「こちらの奥さんは御在宅でせうか。」と尋ねた。

「僕が、今のところ、こゝの奥さんですが、何の用です。」と、その男は、すこし可笑しさうに言つた。

「あのう……えいと……もしも……右衿は御人用でありませんか。」とお春が訊くと、

「僕、石鹼がいりさうに見えますか。汚いんですか。」と、男は案外な返答をした。

お春は、笑窪を作つて笑つて、

「そうぢやないんです。私石鹼を賣つてゐるのです。今第一等だつていふ評判の石鹼を御知らせしやうといふんです。その名は……。」

「あ、そうですか。僕、それを知つてゐますよ。純粹の植物性の脂で作つたツていふんです。」

「ごく純粹なんです。」と、お春は保証した。

「酸の氣はなくてね。」

「え、すこしも。」

「それで、子供でも、樂に洗濯が出来るんですね。」

「赤子でも。」とお春が矯正した。

「ははあ、赤子？　此頃は、子供でなくて赤子といふんですか。段々、あとへ年をとるんだな。」

話さない先に、その石蔵の効能を心得てゐる御客にぶつかるとは、運の良い事だ、とお春は思つた。それで、ますますくにごくして、その人に勧められるまゝに、傍の腰掛に、縁の端近く座を占めた。そして紅蕃薇の入つてゐる飾り函の奇麗な事を見せ、紅の方の値段と、白雪の値段とを話しなりしてゐるうちに、門のところに待たしてあるおしまの事を忘れてしまつて昔馴染の人見たやうに、この男と話しこんだ。

「僕は、今日は此家の主人だけれど、この人間ぢやないんだよ。」とこの愉快な人はいつて聞かせた。

「僕は、叔母の家へ遊びに来てるのさ。その叔母が今日出掛けて留守なんだ。僕は、子供の時分こゝに居たんで此處が大好き。」

「子供の時に居た田舎に勝すいゝ處はありませんね。男はチラとお春を見て玉黍蜀を下へ置き、

「君は、子供の時分を、昔の事みたやうに思ふのかね。」

「私、よくその時分の事を記憶てゐますよ、……すいぶん、古い事のやうに思はれるけれど。」と、お春は眞面目に答へた。

「僕も、自分の子供の時の事をよく記憶てゐる……特別にいやなのだつたから。」

「私のもよ。あなた、その時分に一番困つた事は何？」

「主に、食物たべものと着物が無かつたこと。」

「まあ」と、お春は、氣の毒さうに言つて「私は、靴がなかつたのと、赤ん坊が多すぎたのと、それから書物が思ふやうになかつたのが厭でしたよ。でも、貴方、今はもう任せになつてらつしやるのでせう。え。」と、お春は、心配らしく尋

ねた。何故といふに、この人は、風采が立派で、金持さうに見えてゐながら、眼に疲勞の色があり、黙つてゐる時の口元の悲しげなのが、子供にも解る程だつたから。

「あゝ、今は可なりにやつてゐるんだよ。」と微笑みながら、その人は答へて「一體、幾つ、その石鹼を買つたらいいのかね。」

「あなたの叔母さんとこにいくつあるの。いくつ入用でせうね。」と、商賣氣のないこの賣子がさういふと、

「僕も知らないがね、石鹼は保存だらう。」

「どうですかね。」とお春は正直に答へて「廣告をみませう。きつと書いてある。」と、言ひながら衣袋から廣告を取り出した。

「この商賣をして、大した儲が出来たらどうするんだね。」

「私達ね、自分の爲に賣つてゐるのぢやないんです。」とお春は打明けた。「門のところで馬の手綱をもつてゐる小女は、御金持の鍛冶屋の娘で、御金なんか困らないのよ。私は貧乏だけれど、伯母さんとこに居るの。だから、伯母さん達は、私に、行商なんかさせないわ、あの御友達に賞品を取らせるように手傳つてゐるんです。」

お春は、これまでの顧客に對つて、内情を話さうなどと思ひもしなかつたが、今、思はずこの人に、下山の夫婦や子供達の事、その貧窮と佻しい生活、是非とも置ランプがなくてはならぬ譯を話してしまつた。

その人は、立ち上つて門のところに居る「鍛冶屋の娘」をのぞきながら笑つて、

「そんなにその事を言譯しないでもいゝさ。その家のものが欲しいと思ふなら、ランプを手に入れたつて差支ない。まして、君がその連中にランプをやりたいと思ふなら、なほのことだ。僕も、置ランプが無いのは辛いもんだといふ事を經驗してゐるよ。その廣告を一寸見せて御らん。計算してみよう。下山の家では、もういくら賣るといふんだへ。」

「今月と來月とかゝつて、もう二百個賣れば、クリスマス迄には、ランプが貰へるんです。そして、夏までには傘が手に入るでせうよ。でも、私は今日限りで、あとは、手傳ふわけに行かないの。うちの伯母さんが、やかましいから。」

「なるほど。そんならそれで差支ないよ。僕が三百個買はう。すると、傘も何も揃つて貰へるんだらう？」

お春は、縁の端近く腰掛に坐つてゐたのに、今の語をきいて、急に身體を動かした拍子に、後ろへひつくりかへつて「はしどる」の叢の中へ落ち込んでしまつた。幸ひ、低い縁だつたので、買主が、可笑しがりながら早速引き上げて、立たせて置いて、塵を拂つてくれた。

「大きな注文を受けた時に、びつくりした顔をしちゃいけない。如何でせう、三百五十個に願ひますまいかといふんだね……立入らしくもなく、沈没してしまつたりしないで。」

お春は、今のしくぢりに顔を眞赤にして、
「私にや、とても、そんな事は言へないわ。でも、貴方そんなに澤山お買ひになつていゝんでせうか。ほんとにお差支ないの。」

「もしお差支なら、他の方で儉約をするさ。」とふざけたやうに、この慈善家先生は答へた。

「もし、貴方の叔母さんが、この石鹼がお嫌ひだつたら、如何しませう。」とお春は、案じ顔に尋ねた。

「いや、僕の叔母さんは、僕の好くものを、いつでも好くんだ。」

「私の伯母さんは、そうでないのよ。」

「ちや、君の伯母さんが、どうかしてゐるんだ。」

「さもないや、私がどうかしてるのね。」とお春は笑つた。

「君は何といふ名なの。」

「近藤春子」

「春子ツていふのか。僕の名を知りたいかね。」

お春は、眼を輝かせて、

「私知つてるわ。貴方は、お伽話のアラデンさんにちがひない。私一寸かけ出していつて、おしまさんに教へて上げてもいいでせう？ きつと待ちくたびれてゐるから。聞かしてよるこばせてやりませう。」

その男が、うなづいて見せたので、お春は、細道をひた走りに走つて、馬車の間近に來た時には、我慢しきれなくなつて、

「一寸、おしまさんく、みんな賣れてしまつてよ。」

アラデン君も、にこくして後から隨つて來て、この僞まがのやうなお春の言葉は事實だと證明してくれ、馬車の後部から石鹼の箱を下ろし、廣告まで引取つて、その晩、すぐ賞品の事を會社へ掛合つてやると約束した。

「もし、君方二人ね、どうにかして祕密が守れるものならね、黙つてゐて、感謝祭の日に、下山の家へランプが届くやうにしたら面白からうね。」と言ひながら、二人の足の上に古膝掛をたくし込んでくれた。

二人は、悦んで同意し、口を揃へて、有りがたうくを騒々しく言ひ立てた。お春は、眼に嬉し涙をさへ浮べてゐた。

「どういたしましたと。」と、アラデン君は、笑ひながら、帽子を脱つて挨拶をし「僕も、以前販賣掛りのやうな事をしてゐたんで……何年も前だが……手際よく商賣が行くのが僕は好きだからね。さやうなら、春子さん。何でも賣るものがあつたら、一寸、僕に知らせて下さい。僕は、前以てその品が入用なのに定まつてゐるから。」

「さやうなら、アラデンさん。きつとお知らせします。」と、お春は、黒い髪を揺り動かし、手を振りく答へた。おしまは、物に怖ぢたやうに小聲で。

「一寸、お春さん。あの方、帽子を脱つたわ……私達まだ十三にもならないのに。私達が大人になるにはもう五年かゝつてよ。」

「いゝわ。今だつて、もう大人の玉子ですもの。」

おしまは、思ひ出しては悦びに堪へられなくて、

「そして、膝掛をたくし込んでくれたのね。なんて素晴らしい人でせう。品物をみんな買ひ取つてくれるなんて親切ね。たつた一日で、ランブも傘も貰へるやうになるなんて！ あなた、桃色の着物を着て来てよかつたでせう……うちの母さんが、下へフランテルを着せたにもせよさ。あなたは、紅や桃色を着るとよく似合ふの。そして茶色なんかだとまるで駄目。」

「うそなのよ。」と、お春は溜息をして「あなたみたやうだといゝけれど……何色でもよく似合ふから。」と言つて、おしまのまるっこい赤い頬や深みのないその碧い眼や、氣の利いた語の出た例のないその紅い唇を、羨ましそうに眺めた。

「いゝぢやないの。」と、おしまは慰め顔に、「あなたは、大變賢い子だつて皆他人がいふわ。そして、うちの母さんが、あなたは、年が行くにつれて、段々容色が好くなるだらうつて。うそのやうだけれどね、……私も、それや見ツともない赤ン坊で、つひ一二年前まで不綺麗だつたの……赤ツ髪が黒くなら迄はね。今の方は何ていふ名なの。」

「私、聞いて見やうとも思ひ付かなかつたわ。」と、お春は叫んだ。「おみね伯母さんは、お前らしい事だときつと仰るでせう。ほんとに私のしさうな事ね。そら、アラデンとランブの伽話をあなた知つてるでせう？」

「まあ、お春さん。始めて遇つてすぐ、其人に渾名を付けるなんて、あんまりぢやないの。」

「アラデンといふのは渾名といふんでもないわ。何しろ、あの方ね。笑つて悦んでゐたらしかつたの。」

人間以上の努力で、二人は、その唇に封印をして、右の祕密を守り了せた。もつとも誰が見ても、二人はどうかしてゐ

るとしか思へなかつたけれど。

感謝祭の日に、置ランプが大きな函に入つて到着した。下山シーツは、荷を解いて、それを据え、にはかに妹達の面賣上手なのに感心しだした。お春はランプの來た事を聞いたが、すぐは見に行かなかつた。それといふのが、夜になつてその勝利品に燈火が點いて、紅のちりめん紙の傘越しに、赤い火が輝くのを見やうとの根柢なのだツた。

(續く)

編輯だより

雨の日

○雨の日は幼稚園の禁物ときまつて居たりするが、そう嫌つてばかり居ても仕方がない。雨の日は雨の日らしい一日がもてないものだらうか。

○一月三十一日、雨の日は此外とばかりも言はれまい。北緯何度、温帯の國として、殊に支那大陸の方の關係から、毎年のことに昔からきまつて居る梅雨といふものを、毎年新しい特別のことに嫌に思ふばかりも居られまい。

○傘があり、足駄がめり、合羽がある。幼稚園の保育にも、雨の日の用意は、ちやんと初めから出来て居ていゝものではあるまいか。殊に、子どもの方では、おとなが風托する程に雨の日を困るものでもない。それを子どもに持ちあぐませるのは、吾等の方に用意が足りないせいではあるまいか。

○雨日またよしと茶人めき詩人ぶる譯ではないが、うす暗い室内あまたれの音、窓硝子の外に見る桐の雨、なか／＼捨て難い趣のあるものもある。それが子どもには又子どもらしく、おもしろい印象のあつたりするものもある。やゝ、しんみりとしたお話しづかなお客さまごっこ、或は部屋のうち暗さを利用した影繪、幻燈、人形芝居も興があらう。

○雨のいろ／＼には、それ相應の違つた味もあり、趣きもある。それにふさばしい題目もいくちもあらう。雨の日の雨ものがたり源氏ではないが、いゝ一巻の保育日誌をつくつて見るのもよからう。(倉)

| 御注意 | 料告廣 | | 表價定 | | 冊數 | 定價 | 郵費 |
|--|-------|-------|-------|------|------|-------|-------|
| | 表紙 | 裏紙 | 十二冊前金 | 六冊前金 | | | |
| (外國行郵税は一部十二錢の割にて御前送下さい) △本誌購讀御希望の方は定價表により振替貯金で御送金下さい(東京四六書堂發行部教文書院宛) △前金切れの節は帶紙に「前金切」と致します。 △郵券送金の節は一割増で一錢の手に願ひます。 △本誌の一切は教文書院宛御照會下さい。 | 普通面一頁 | 金四拾五圓 | 同 | 金七拾圓 | 金七拾圓 | 金貳拾五錢 | 金貳圓拾錢 |
| | 表紙前付 | 金七拾圓 | 同 | 金七拾圓 | 金七拾圓 | 金貳圓拾錢 | 金貳圓拾錢 |

大正十三年五月二十八日納本 第二十四卷第三號

無禁
斷載

編輯者 東京女子高等師範學校内日本幼稚園協會
 倉橋惣三
 發行所 東京市下谷區上根岸八十八番地
 越元新吉
 印刷者 東京市小石川區戸崎町七十二番地
 沖田瀧次郎
 印刷所 教文書院印刷部

發行所 教文書院

東京上野公園寛永寺坂下(上根岸八十八)

電話下谷三〇四七番・一九五一番
 振替東京四六一一一番

理學博士 山口銳之助先生
文學博士 藤岡勝二先生

監修 教文書院編輯部編纂

カーレント學生參考書

最新正送
ボイ各料
ナイ各冊
ト活金各
ツ字冊各
ケ採五冊
ト採五冊
型用錢錢

現代學生知識の泉源!!

豫習復習受験の要書!!

學生の良師となれ
簡にして要を盡せ
確實にして權威あれ
學習に興味あらしめよ

これが本書編纂の
モットーである。

近時諸種の學生參考書が續々と出版されるが、不備不正確なものも多く、學生諸君をして其選擇に迷はしめるは吾人の最も遺憾とする所である。吾がカーレント參考書は特に是等の點に着眼して前條のモットーに基き、理學博士山口銳之助、文學博士藤岡勝二兩先生監修の下に、各々専門家を分擔し銳意完成したる模範的良參考書にして、豫習、復習、受験に必要缺くべからざるものである。

| | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 西 | 日 | 代 | 幾 | 化 | 物 | 外 | 日 |
| 洋 | 本 | 本 | 何 | 理 | 理 | 國 | 本 |
| 史 | 史 | 數 | 學 | 學 | 學 | 地 | 地 |
| 上下二冊 | 上下二冊 | 上下二冊 | 上下二冊 | 上下二冊 | 上下二冊 | 上下二冊 | 上下二冊 |
| 生 | 鐵 | 植 | 動 | 地 | 英 | 國 | 東 |
| 理 | 物 | 物 | 物 | 理 | 文 | 史 | 洋 |
| 衛 | 物 | 物 | 物 | 概 | 解 | 史 | 術 |
| 生 | 學 | 學 | 學 | 論 | 釋 | 史 | 術 |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 冊 | 冊 | 冊 | 冊 | 冊 | 冊 | 冊 | 冊 |

發行所

東京上野寛永寺坂下
(上根岸八十八)

教文書院

(振替東京四六壹壹壹番
電話下谷三〇四七番)

東京女子高等師範學校
保姆兼教諭 坂内みつ子先生著

子供の遊ばせ方

四六判クロス製・ポイント活字・正價金一圓八十錢・書留送料十三錢

訂正第八版出來

子供を遊ばせるところ

中々難しいが又愉快なものである。
 幼児教育の理論と實際に精通した著者の、子供に對する遊ばせ方の研究書であります。發行以來半歳後の今日賣行きの持續するのは内容の良い結果と信じます。今回改版訂正の上第八版を發行致しました、學校でも家庭でも備ふべき良書であります。

次目

- 子供を遊ばせるといふ意義
- 子供を遊ばせるに大切な條件
- 子供の好む遊びの種類
- 子供の好む玩具の種類
- 玩具選定の標準
- 子供を遊ばせる方法
- 室内遊び
- 團體遊び
- 個人的遊び
- 野外遊び

以下
數十項

發行所

東京上野公園
寛永寺坂下

教文書院

電話下谷三〇四七・一九五一番
振替東京四六一二二一番

茂木由子先生作謠
荻原英一先生作曲

土川五郎先生振付

第一輯

律動遊戯

菊判クローズ製・舶來アートペーパー・寫真版六十四圖

近刊 七月上旬發賣

茂木先生の謠に荻原先生の作曲。遊戯界の第一人者である著者の振付と三先生の御盡力で今迄にない理想的の遊戯教本が出来ました。各々多數の寫真版を入れて表情の變化を理解し易く巧みに現はしてあります。

發行所

（東京上野公園寛永寺坂下
上根岸八十八）

教

文書院

電話下谷三一九〇
一五七番
振替東京四六一二番

東京女子高等
師範學校教授

矢澤 弦月 著

四六判總クローズ 正價金三圓
ポイント新活字 書留送料十七錢

近 刊

美學及藝術論

畫會新人の稱ある著者が多年苦心研究の結晶美學、藝術論の眞
隨を縱横に批判せる一大論文である、殊に日本美術史論、西洋
美術史論は著者によつて初めて味ひ得らる。

發行所

東京上野公園
寛永寺坂下

教文書院

電話 下谷三〇九四一七番
振替東京四六一一一番



歌へ！

清らかに高く

山杉高

マンドリン

獨奏集

1

本山水

歌劇集

2

著

芳春重

ヴァイオリン

獨奏集

1

樹雄治

行進曲集

3

舞へ！

圓舞曲集

2

純真な乙女よ

| | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 價 | 價 | 價 | 價 | 價 | 價 | 價 |
| .70 | .70 | .70 | .50 | .70 | .70 | .70 |

第二十四卷第三號(每月一回一日發行)

大正十三年五月廿八日印刷
大正十三年六月一日發行

定價金三十五錢

院書文教